「火災延焼状況」図

焼け残った神田佐久間町

右に掲げた地図「火災延焼状況」は、関東大震災後の大正13年、警視庁消防部（現在の東京消防庁の前身）が、地震により発生した火災が、どのように延焼していったかを調査し作成した地図である。

江戸時代から明治にかけて神田には大火が多く、火事だ！といえば、神田か！といわれた。中でも神田佐久間町が火元の場合が多く、口の悪い人は佐久間町ではなく悪魔町と呼んでいたといわれている。その佐久間町が右の地図でもわかるように、関東大震災の際焼失を免れている。なぜであろうか。その理由は千代田区役所が編纂した「おはなし千代田」に、次のように記されている。

「地震の約４時間後、神田方面から燃えてきた火は神田川南岸まできて、さかんに火の粉を佐久間町に降らせました。この時、町内の人たちは逃げるより火を消そうと集まりました。

中でも木造だった佐久間町小学校の屋根に火の粉が入ったときは、２階の天井裏に学童用の机をつんで入って、バケツリレーで水をかけ、最後には豆腐をぶつけて火を消しました。そのころは豆腐屋・魚屋・八百屋などは専用の井戸を持っていたので、水道が止まっても水には困らなかったのです。

また米屋河岸に並んだ米の倉庫が一種の防火壁となり、そのうえに人々が働いたおかげで１万数千俵の米は焼けずにすみ、その後の東京の復興におおいに役に立ちました。

２日の朝８時ころ、蔵前方面からの猛火は佐久間町の東側から北側にかけて襲いかかりました。人々は和泉町の東京市の下水ポンプ場の水を利用したり、町内の帝国ポンプが得意先に納入するばかりだったガソリンポンプで、井戸水をくみ集めて放水したりして、午後６時ころ完全に消し止めました。こうして、約31時間も人々は町を守る努力を続けたのです。」

このようにして焼け残った佐久間町の一郭を東京市（現在の東京都）は、昭和14年「町内協力防火守護の地」として史跡に指定した。戦後その記念碑が佐久間小学校（現在の和泉小学校）の校庭に建てられ現存している。なお、佐久間町は空襲の際にも焼け残っている。

関東大地震が起こった大正12年９月１日の東京は、前夜から断続的に雨が降り気温も湿度も高く、真夏を思わせる暑さであった。

そうしたなか、午前11時58分44秒、突如、関東地方一帯を大激震が襲い、家屋は一瞬にして倒壊し、その下敷きとなって多数の死者や傷者などが発生した。

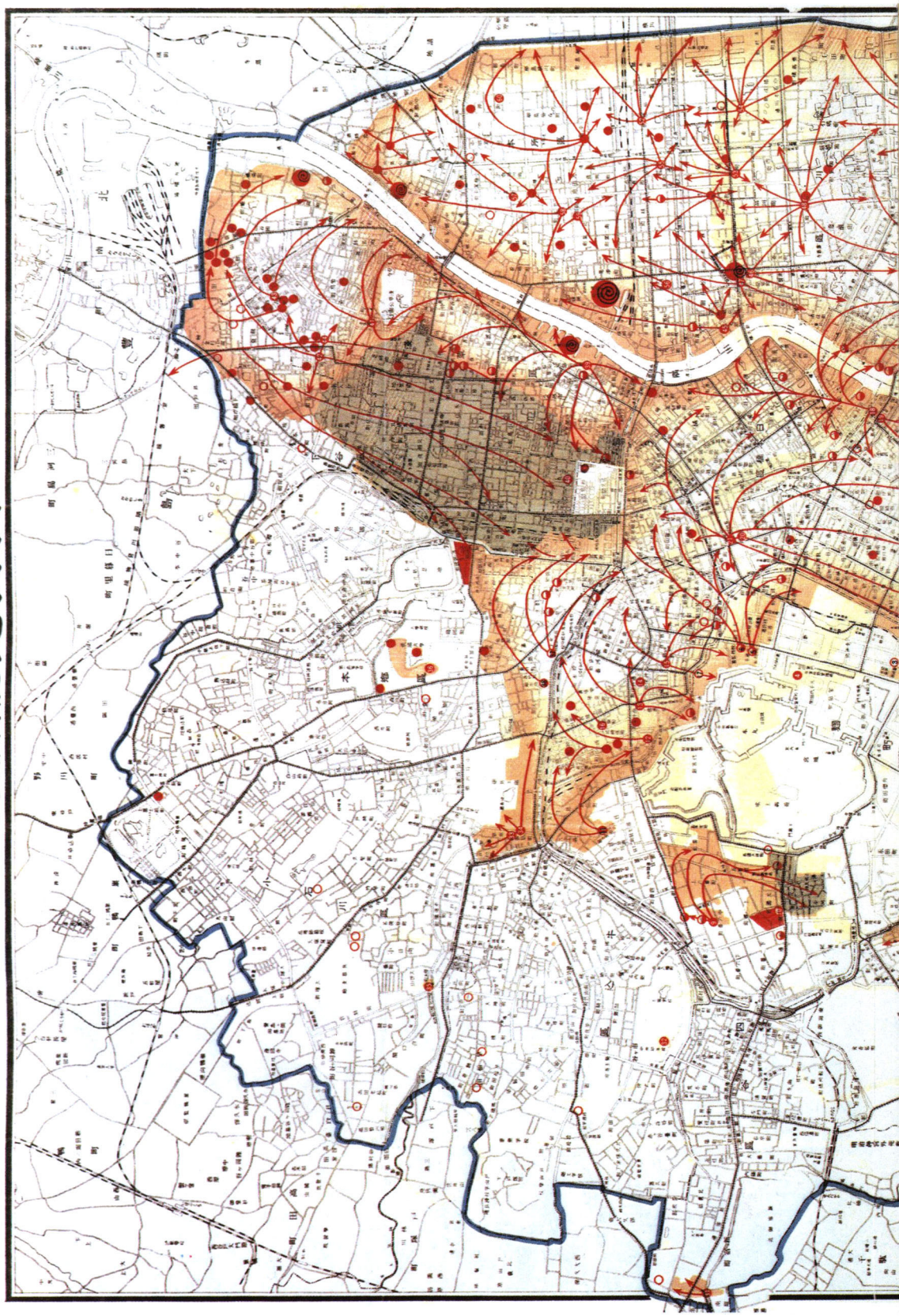
東京全体での被害は、焼失家屋 22万1,718戸、焼失面積 1,758万 630㎡、死者６万420人、行方不明３万 6,634人、傷者３万 1,051人であった。

当時の消防力は、消防職員 771人、消防ポンプ車38台、水管自動車17台、はしご車５台、消防署６署、消防出張所20所、消防派出所10所などで、発生した火災の様相に比べて、人員・機械とも非力であった。

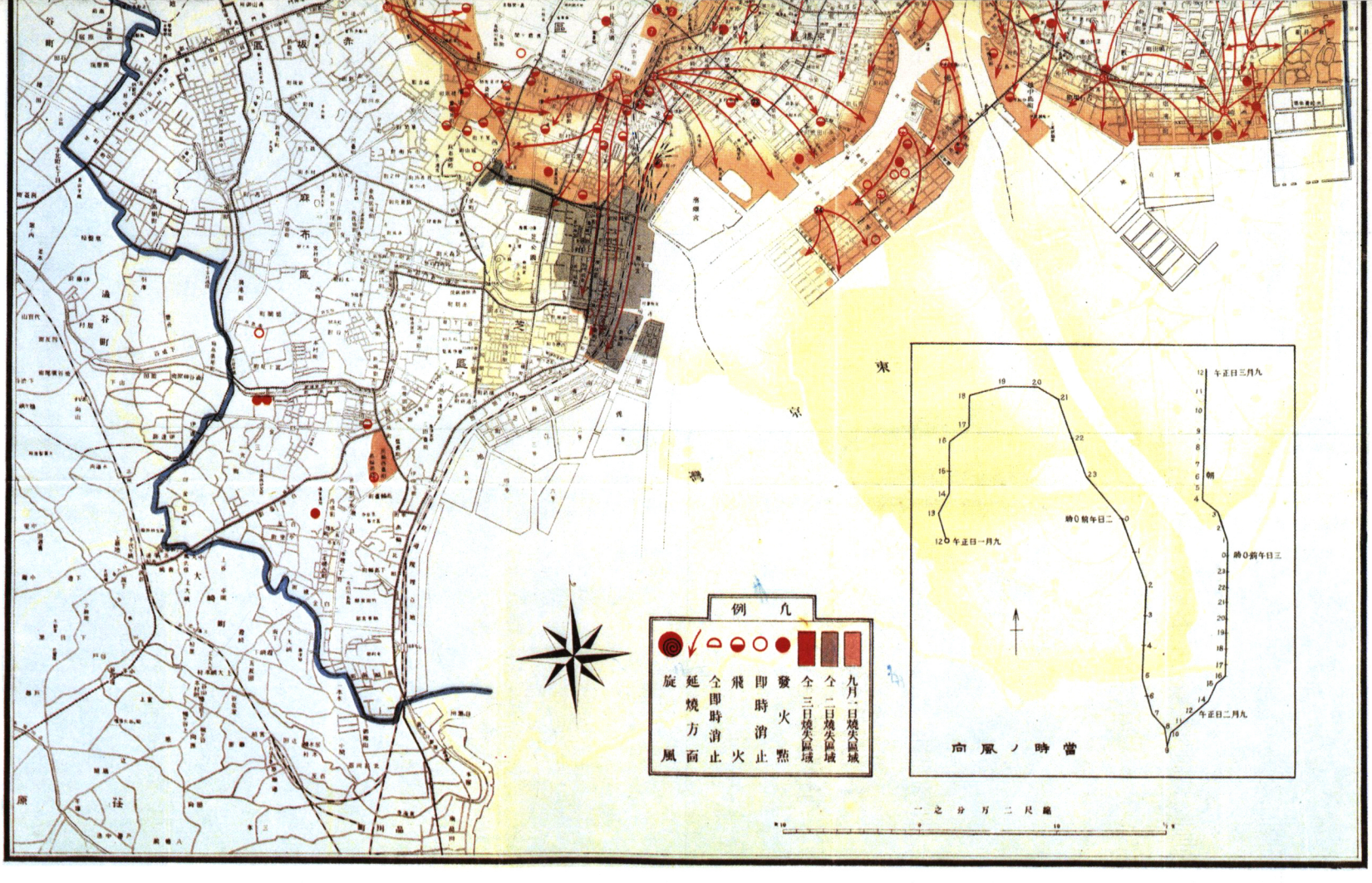
火災や地震などから大切な命や財産を守るためには、防災訓練に参加するなど、日ごろから一人ひとりが防火・防災の意識と防災行動力を高めておくことが不可欠である。

また、いざというとき「自分たちのまちは自分たちで守る」という、自主防災の組織的体制の下で、佐久間町の人たちと同じように、地域の人々が協力して災害に立ち向かう“まちぐるみの防災の輪”を広げることが大切である。

白井和雄／元消防博物館長



火災延焼状況／東京消防庁「東京の消防百年の歩み」付録


東京灣
赤坂區
麻布區
芝區
渋谷町
大崎町
目黒川
品川
例凡
九月一日燒失區域
仝二日燒失區域
仝三日燒失區域
發火點
即時消止
飛火
仝即時消止
延燒方面
旋風
當時ノ風向
九月一日午正
二日午前0時
二日午正
三日午前0時
三日午正
朝
縮尺二万分之一